

はじめに

2020 年 7 月 25～26 日にかけて、表題の研究会大会が行われた。本年は Covid-19 という「例外」状態の中、オンライン開催となった。報告者は、パネル① 家族・少子化・女性天皇—ジェンダーからみた日本の家の歴史、報告 3「ジェンダーの視点から見た近代化・大衆化-歴史総合を見据えた国民国家概念の教材化への可能性」の報告者の一員として、中山恵(東京女子大学院生)・川崎一輝(京都私立高校)・松口優花(九州大学学生)・川島啓一(同志社中高) (敬称略) とともに報告を行った。

1 ジェンダー“史”か、ジェンダーの“視点”か

報告にあたって、筆者に与えられた課題は、「高大連携」という場で「ジェンダー」の視点を考えるということの持つ意味とはそもそもなんであるのかということであった。今や歴史学におけるジェンダー史のインパクトはもはや言及するまでもなく、また歴史教育においてジェンダーの視点の必要性についても度々言及されてきた。高大連携教材共有サイト 13 には、「ジェンダー史」のカテゴリタグが作られ、テーマ史の項目の中では、「近代化」の 24 件、「グローバル化」の 16 件について 9 件の教材がアップロードされている。これは時期学習指導要領の 3 つの柱の一つである「大衆化」のタグがつけられた教材の 5 件を上回る(2020 年 7 月 22 日現在)。

こうしたジェンダー史の目指すところは、小浜正子(2014)の提起によれば「ジェンダー主流化」であり、ここに求められていたのは、「歴史研究・教育全般においてジェンダー要因に注目し、ジェンダー視点を導入すること」であった。しかし、なぜ、新学習指導要領が施行されることが目前に迫る 2020 年において、高大連携歴史学研究会という場で、我々はジェンダー史のシンポジウムを設定「している」のだろうか。そもそも歴史学におけるジェンダーの視角のインパクトはそれまでの歴史認識や歴史主体のありようを根底から揺るがすものだった。にもかかわらず、「ジェンダー史」それ自体は、高校の歴史教育の現場では分析視角としてのレベルではなく「ジェンダー史」というコンテンツとして発掘されている。そうした蓄積自体の貢献は計り知れないが、コンテンツとしてのジェンダー史がまだまだ「発掘」されなければならない現状は、逆説的に「ジェンダー主流化」が達成されていない現実を映し出してはいないだろうか。

2 コンテンツから視角へ

姫岡とし子(2014)は大学の教養課程の歴史教育において、ジェンダー史が個別のコンテンツとして孤立することに警鐘を鳴らしている。上述の状況を鑑みるならば、高校教員としての我々も、この警鐘に耳を傾ける時期である。我々の日々のたゆまぬ教材開発が、コンテンツとしてのジェンダー史教材の発掘だけに止まってしまうならば、このジェンダー史の孤立化を我々の努力が下支えしてしまうという皮肉な結果を招きかねない。そのようにして、パネル全体を捉えたときに、やはり未だ、ジェンダー史はコンテンツ開発としての議論が中心となっており、「ジェンダー視点の導入」には若干の課題があるように思われた。それは、現在の歴史教科書が男性史中心に描かれていることから無理からぬことであるが、ジェンダーというものが、権力関係を含んだ性規範とそこから生じる社会的現象を射程に収めているならば、高校教師としての私たちは、新たなコンテンツ開発と同時に、現在の教科書や自身の授業そのものを、ジェンダーの視点で読み替えていく営みがより求められているように思われた。

《参考文献》姫岡とし子 「教養教育とジェンダー史」『学術の動向』 2014